



河上肇記念会報

No. 17

1984. 7. 30

〒542

大阪市南区島ノ内一〇一十九（丸善石油ビル）

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二一三六九六

振替口座 大阪 三一三一九五

目次

白石嘉先生への弔詞	杉原四郎	(2)
橋本峰雄師を悼む	一海知義	(3)
会員の追悼文をお寄せ下さい		
研究会員と老令会員の募集		
河上肇全集編集室日記	米浜泰英	(5)
センターだより		
—河上肇と中国二題—		
図書紹介	細川元雄	(8)
会員通信		(10)
墓参記		(11)
当番雑言		(14)
編集後記		(15)

白石崑先生への弔詞

謹んで白石崑先生の御霊前に申し上げます。

先生は同郷の経済学者河上肇を慕って京大に入学し、卒業後新聞界に入ってから、河上から学んだ教訓を体しつつ、困難な時代をよく歩みつつけて来られました。先生がどんなに河上肇を敬愛し、彼を理解しておられたかは、エッセー集『サンチョ・パンザの言葉』に収められた二つの文章がよく示しています。その中には河上の詩や短歌が数多く引かれ、それらの「ひょうひょうとした味のあるユーモア」は彼の「何ごともいいかげんにしない、ぎりぎりまでつきとめねばやまぬ精神から……巧まずして生れたものである」ことを説得的にのべておられます。私はこれを読むたびに、河上肇の美しい人間性にうたれるとともに、ヒューマニストであり文人でもあった白石崑の人間性にも、深い感銘をうけるのであります。

先生は、東京河上会の創立以来の中心メンバーとして、その発展に尽力されましたが、何といっても最大の御仕事は、河上肇著作集の刊行でした。これによって河上研究は貴重な礎石を与えられたのですが、先生はこの著作集に決して満足されず、より大規模なもので、できれば全集の刊行に強い意欲を持っておられました。そしてその実現に一步ふみ出したのは、約十年前のことでした。最初は編集プランの相談に先生も加わって私達を指導してください

いました。以来迂余曲折の末、現在の全集のかたちで刊行されることになり、先生はその進行をあたたかく見守ってくださいておりました。おそらく先生は、全集完結の日を最も強く待ちのぞんでいた一人だったであらうでしょう。

その全集も今や峠を越え、完結の見通しも何とかつきはじめる段階に入ったこの時に、先生とおわかれしなければならなくなつたことは、誠に痛惜のきわみであります。この上は、この全集に寄せられた先生の熱情と期待とをあらためて肝に銘じ、完成をめざして力をそそぐ所存であります。また河上肇記念会といたしましては、東京河上会と手をたずさえつつ、河上精神の継承と普及とに、一そうつとめて参りたく思っております。

先生、どうか安らかにねむり下さい。

一九八四年三月二十三日

河上肇記念会代表

杉原 四郎

表紙写真 一九五九―六〇年に青木文庫版をもとに中国語訳された「資本論入門」。秀夫人に贈られてきたもの。（京大河上文庫蔵）

橋本峰雄師を悼む

一 海 知 義

橋本峰雄師の訃を聞いたとき、私は河上肇博士が法然院を詠じたつぎの一首を思い出していた。

この京に静けき寺の一ツありゆふぐれに来て鐘の音をきく
河上さんは没後その法然院の墓地に眠り、この寺の第三十世貫主であった橋本師もまた、同じ境内でとこしえに眠ることとなった。いま二人の間でどんな対話がかわされているだろうか。

橋本師と私は、二十年来同じ大学の同僚だったけれども、学部を異にするため、学内で顔をあわすことはあまりなかった。しかし年に一度、法然院で開かれる河上肇記念会の総会では必ずお目にかかり歓談した。

その日橋本師は、まず河上さんのための法要の導師をつとめられる。

本堂に集まった会員たちの前に、数人の僧を従えて現われ、やや長時間にわたる読経をささげ、つぎに境内の墓地に足を運んで、河上さんの墓碑の前でまた読経し、礼拝する。法要は以上で終り、そのあと大広間で開かれる懇談会にも、師は時間の許すかぎり出席して一場の講話をおこない、会員たちと歓談されるのが常であった。

橋本師の講話は、いつもユーモアをまじえた軽い語り口ではじまっていたけれども、その内容はあらかじめ周到に準備されたものであった。あるときは話の枕に杜甫のやや長い詩、あの有名な「人生七十年古来稀なり」という句をふくむ七言律詞「曲江」を、よどみなく暗誦して、参会者を感嘆させたこともある。講話はいつも世相への諷諭をふくみ、私

などは毎年それをきくのを楽しみの一ツにしていた。しかしその講話も、今はもうきけない。

橋本師には、河上さんを論じた文章がいくつかある。二人を結びつけていたのは法然院という寺院だけでなく、師は以前から河上さんに深い関心を寄せていたのである。ところで、それらの文章の一ツを収める『20世紀を動かした人々』（第13巻、講談社、一九六三年）という書物を私は橋本師から借りたことがある。私がつとめる学部の図書館でしらべたところ、その巻が欠けていたため、京都へ行ったついでに法然院に寄った。まず小僧さんが出て来たので、来意を上げるとかしこまって引きさかた。つぎに中僧（？）さんが出て来て、同じく来意をきくと奥に引っこむ。こんどはご本人がと思っていると、何と年とった大僧（？）さんが出て来て、またいいねいに来意をきく。よほどウサンくさい人物と思われたのか。いやいやそうではあるまい。やはりこのお寺はよほど格式が高いのであるう、と氣をとりなおして待っていると、ややあってついにご本人が、これはまたいとも氣さくに、ニコニコしながらヒョイヒョイと出て来られて、「やあ一海さん、何の用？」

嚴重な関門とはまことに対照の妙あって、「由緒正しいお寺の氣さくな和尚さん」という印象が、今も消えない。お借りした本は、河上さんの漢詩なども引用してあってなかなかおもしろく、その後私が書いた『河上肇詩注』（岩波新書）にも参考文献として引用させていただいた。

橋本師の右の書物に収められた河上論は、やや文学的な評伝だけれども、師の専門は哲学であり、またいうまでもなく宗教学であった。「河上肇における仏教と唯物論」と題する論文などもある（稲葉義編『仏教とマルキシズム』所収、創元社、一九六六年）。最近法然院からといた忌明のご挨拶には、師の戒名は「徳蓮社量上人遊哲峰雄大和尚」とあった。「遊哲」の真価が発揮されて、なお未開拓な部分が多い「河上

塾と宗教」についての師の自由闊達な談論を、あの「静けき寺」でもっとききたかったと、それがくやまれてならない。(八四・五・二九)

会員の追悼文をお寄せ下さい

河上は勉強する前に自叙伝とか伝記とかを読んで、人物を確かめ、しかるのち、全面傾倒の姿勢でその著作物にむかったと聞きます。

これまで追悼の文は編集者のほうから個々にお願ひして来たのですが、かたよりを免れません。河上肇記念会は会員の支えで成り立っているもので、会員の方はこの会がお世話になり、会の柱であった方であります。

とうとうたる物神崇拜の現代日本の流れの中で、世俗の特典も得られない、しゅみでも遊びでもない記念会を支える会員は、さまざまな経歴や生活を持っておられながら、人格的に立派な方々でありましょう。会員の方々の人間味のなにかが、河上肇記念会という一種の社会運動を支えることで社会運動となっている。この会がどんな方々によって支えられているかは、お名前とご住所を知るのみで、会の雑用をしているだけの妻にもわたしにも、一部の名士を除いてイメージが湧かない。

児玉誠さんのたよりに、眞正博、矢野恒範の両氏が亡くなったとある。妻は両氏を名簿から抹消する。

妻ともども眞さん、矢野さんがどんな方であったかを知らない。わずかに眞さんについて次のような意味の通信を知るにすぎない。「今年は病床にあって出席できないが、来年は出席できるようにガンバリたい」(会報一六号二〇ページ)と。会員の紹介も、書かれる側にとって、迷惑なこともあり得ます。だが、せめて、人間のあたいたまる棺をおおったとき、河上のいわゆる「人物」として、どんな方によってこの会が支えられていたのか、亡くなった会員の知己の方に追悼の文を寄せていた

だきたい。そして多くの会員とともに故人をしのび、ご冥福を祈ることが出来たら、地下の河上もまた喜ぶことと愚考します。

研究会員と老令会員の募集

一、研究会員の募集

河上肇に関心を持っていて、会報を連続講読したい、また将来の研究資料として、手元に保存して置きたいが、経済的理由で会員になれない方、その旨、お申出下されば会費免除の会員といたします。

その代り、せっかくお送りしたのに、返送されることなどがないように、転居通知などは確実に事務局宛に実行して下さい。

二、老令会員の募集

従来より会員であって、今後とも会報が読めるし、読みたい、また周囲にもひろめたいが、老令のため、送金の手続きがとれない、困難だ、あるいは年金生活のため経済的に会費の納入がむずかしい方は、その旨、お申出下されば、会費免除といたします。

ただし、お送りした会報がムダにならないよう、周囲の方々を含め、事務局への通知は確実にするよう、おねがいします。

註 会員の皆様へのお願ひ

会員の皆様の大きなご支援で財政的な危機を脱出し、すこし余裕ができました。本件は総会の承認事項でありますので、五九年総会に提案したいと存じます。河上精神にのっとり、会員の方々は、きつとよろこんで賛成して下さい。

どうか、早目にお申込みください。

河上肇全集編集室日記

岩波書店 米 浜 泰 英

(一九八三年)

10月21日(金) 京都駅に三時過に到着、その足で羽村さんのお宅を訪問。挨拶もそこそこに目下進行中の日記索引の人名について色々お尋ねをする。姓のみで名のわからない人、また同じ姓で同一人物か別人なのかわからない場合など、解決できないでいる問題がいくつもある。雑談をまじえながらおききした結果、晩年京都へ移って以後関わりをもった人々については、かなりの人の名前が明らかになった。なかには、やはり二人の人物をこちらが間違えて一人の人としてしまっているような例もあった。昭和十八年、秀夫人の不在中に身のまわりの世話をする「北村のおばさん」はすべて「北村かつ」という名で拾っていたが、実は「かつさん」は「おばさん」の娘さんで助産婦をされていた方だそうである。六時過ぎ羽村邸を辞去。京大河上文庫へうかがい、行季二つに入った河上肇宛の書簡を拝借して清水房へ向かう。細川さんに無理をお願いして宿まで同行していただく。今晚から二泊の予定で、杉原先生、一海先生と手分けしてこれらの書簡に目を通す合宿が始まる。

10月22日(土) 話にはきいていたが、清水房の朝食はなかなかリッチなものである。朝から生きのいい刺身やマツタケが出るので、これで仕事さえなければ何日でも泊っていたいような気がする。杉原先生は御多忙のため、結局昨晩はおみえになれなかったが、朝早くお宅を出られ十時過には宿に到着された。

現在残されている河上宛書簡は、羽村さんの手できちんと整理されている。(A)、(B)、(C)、(D)に分けられ、(A)、(C)、(D)は家族及び親類縁者からのもの、これが全体の四分の三近くを占める。秀夫人の獄中に宛てた書簡はなかでも最も多い。恐らく一通も失なわれることなく完璧な形で保存されてきたのではないかと思う。(B)は友人やお弟子さんからのもの。我々の作業は、まず(B)からとりかかるとにする。

午后、先生方は京都教育文化センターで催される河上肇研究会三周年の祝賀会に顔を出す約束をされているとのこと、それなら私も便乗させて下さいということになって三人揃って出掛ける。折しも時代祭りの当日で、行進の列にぶつかり、車が揃えないために延々歩かされる。

西垣塾子劇団の俳優さんたちによる「河上肇小伝」はなかなか面白かった。この劇だけ見て、またすぐ宿へ引き返したが、このような催しは東京ではとても考えられないであろう。

夜雑談の折、杉原先生から、秀夫人の獄中への通信と河上の獄中からの通信を往復書簡という形で出版したら、おそらく素晴らしいものができるのではないだろうか、という話が出された。一海先生も賛同され、宮本顯治・百合子の往復書簡『十二年の手紙』のような立派なものができるとはないか、と言われた。全集が終りに近づいたら具体的に検討していいお話ではないかと思う。

10月23日(日) 法然院にて河上記念祭。受付のところ、細川さんから鈴木洵子さんを紹介される。洵子さんには、これまで幼い頃の写真と河上日記の子守りの記事だけで親しんでいたのに、いまや四十を越されている御本人におめにかかった時は、私の頭のなかにある「洵子さん」とは、どうもうまく結びつかなかった。

この会場で、藤田敬三先生の御長男整先生にもおめにかかる。ちょう

ど数日前に父宛の河上先生の書簡がありますと御連絡をいただき、複写をお願いしたところであったので簡単にお礼を述べる。

10月26日(水) 細川さんより来信。先日京都でお会いした折、日記索引中の姓だけで名前のわからない人々について調査をお願いしたところ、さっそくお調べ下さった。わかった人々の名前、大阪商大の小松幸雄氏、京大経済学部事務官の松尾哲彦氏、満鉄の瀧谷小一郎氏。ほかに、日記に出てくる本田譲氏はもしかして本多譲ではないかとのこと。

校了までに間に合えば調べてみたい。なお、小松氏については昨日杉原先生も電話でお知らせ下さった。

10月27日(木) 羽村さんから連絡先を教わった名和統一氏未亡人のお宅へ河上書簡の有無をお尋ねする。「先生の手紙は戦前に警察に殆んど没収されてしまいました。ただわずかに葉書が一、二枚残っていたので、大切にしておりましたら、あまり大事にしすぎてどこへしまったかわからなくなりました」というお話。葉書が見つかり次第御提供いただくことを約束された。

10月28日(金) 先日来、大塚金之助と河上肇との関係が気になっていたので、『大塚金之助著作集』を担当したKさんに何かわかったら教えてほしいと頼んでおいた。本日返事あり、大塚未亡人に電話で尋ねてくれた由。未亡人の話によると、捕まる以前に河上が吉祥寺の大塚宅を何度か訪問したことがあり、ある時は朱墨で書いた立派な軸を河上から贈られたことがあったそうである。それが鮮やかな朱色であったために未亡人には鮮烈に印象に残っているそうである。やはり、地下活動時代に二人は既に行き来していたのである。

11月1日(火) 杉原先生よりはがき到来。このあいだ日記の校注に関わって一海先生から提起されていた自叙伝「思ひ出・断片の部」中の「小国寡民」は、果たして自叙伝に収めるのが適当かどうかという問題に関して。

たしかに、この「小国寡民」と「饅頭の話」の二篇は「思ひ出・断片の部」の他の篇とはちょっと趣を異にしており、書かれた時期もほかのものとはかなり隔っている。昭和二十一年十月に月曜書房から刊行された『思ひ出』のなかには「小国寡民」も収録されている。そしてこの単行本には河上肇の序(昭和二十年十二月二十一日記)としるす)が載っている。生前に当人が編集した本とみなせば、「小国寡民」は当然「思ひ出・断片の部」のなかに含めてよいことになる。しかし、本が公刊されたのは、河上肇の死後九ヶ月近くたった昭和二十一年の十月である。この本は果たして、河上自身が編集したものともみなせるかどうかいささか疑問である。

杉原先生のお尋ねは、この「序」の初出はなにか、ということ。そして、この「序」が自叙伝についての最後の文章とすれば、自叙伝は「思ひ出」のなかの一部分になる、という御意見である。

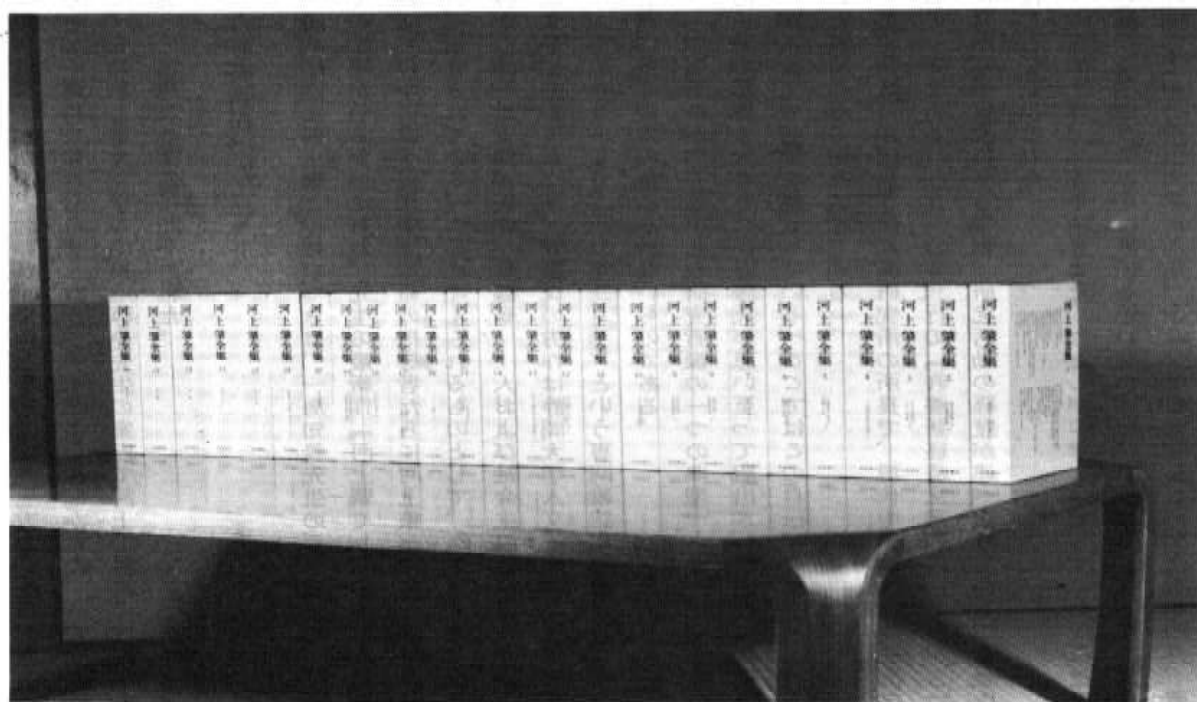
それというのは、『思ひ出』の「序」の冒頭に「思ひ出は余が過去数年間に書き溜めおきし旧稿の題名にて、断片の部、自伝の部、獄中記の三部より成る一種の随筆集なり。」とあるからである。この河上の構想に忠実に従うとすれば、全体を従来のように「自叙伝」と名づけるのもおかしく、「思ひ出」としなければならないことになろう。

11月2日(水) 昨日にひきつづいて杉原先生よりはがき到来。今日は第二期の『資本論入門』についてどんな準備作業が必要かという内容。それによると『入門』の第一篇「商品および貨幣」のところは、(1)八分冊

版↓(2)合冊版↓(3)『マルクス主義経済学の基礎理論』の下篇↓(4)『入門』の第一篇、と四段階を経ており、その間の変化をフォローする必要がある。この引き合わせ作業は相当に厄介なことになるのでそろそろ準備にとりかからねばならない。

11月9日(水) 午前九時半天野敬太郎先生をお宅に訪ねる。岩波書店七〇周年のパーティーには出られないが、私が上洛するなら是非会いたいと所望されていた。昨年おめにかかった時よりも一層お元気になられた御様子であるが、脚が御不自由なので外出はほとんどなさらないという。先生御担当の全集の別巻について意欲的なお話を承わる。全集の新しい巻が到着することに、かつて『河上肇博士文献志』で作成された目録原稿と照合され、その原稿に追加、訂正を書き込まれているそうである。こちらの方は最終巻の準備はまだほとんどできていないので、専ら先生のお話を拝聴するのみ。十一時過ぎおいとまする。駅へ向かう車の中で、先生が楽しそうにおっしゃられた「この一冊をみれば、河上肇について知りたいことが何でも引けるような、そういう便利なものを作りたいですね。」というお言葉が何度も頭を去来する。相当な大作業になりそうな予感があることしきり。

四時前帰社。校正のYさんが待ちかまえていて、日記の校注と索引の校了作業を急がされる。



河上肇と中国二題

細川元雄

△河上文庫来訪雑感▽

京大河上文庫は、本年に入って国際学術交流のため来日中の中国学者の訪問をうけた。四月には、中国人民大学の于学儒先生（政治経済学系副教授、『資本論』を研究しているとのこと）と、五月には「中国国際政治、経済、哲学代表団」五名とであった。いずれも短時間の訪書であったが、年輩の先生方は河上の著書によって導びかれたことから、文庫架蔵の『経済学大綱』、『第二貧乏物語』などを手にして、懐かしまれた。

五月来訪の代表団団長の韓樹英先生（中共中央党校副校長、教授。中国弁証唯物主義学会会長）は、『第二貧乏物語』初版（改造附録版）を手に「これで勉強しました」ときれいな日本語で語られ、感激しておられた。さらに文庫案内役の私に、日本の第一高等学校へ留学していたこと、そして王学文先生を知っているかと問われ、私がうなずくと、自分は王先生に習ったこと、王先生はご高令で今でも中国におられることを話された。

また多くの中国漢詩集が配架されているところでは、韓先生は陸放翁、高青邱などの詩人名をつぎつぎと日本語と中国語で言読され、「古い人たちは、今の中国ではほとんど読まれていません」と、そして微笑しながら若い団員にその名を知っているかと問われていた。文庫が寄託中の河上の講義ノート、入獄前後の新聞切抜、獄中書簡などにも興味深く

見学された。最後に韓先生は「私たちのような中国の人たちがこの文庫を見学に来ますか」と問われ、今年が初めて、先生方が二度目だと答えると、一瞬首を傾けられましたが、すぐに上下に頷かれた。代表团一行は、そのあと京大文学部の松尾尊允先生の案内で河上の終焉の住居前を通過して法然院の墓前に向かわれた。

△許濂新氏のこと▽

現代中国と河上肇との結びつきは、一海知義先生のご研究によって多くの事実が明らかにされた。先生の最新作『河上肇そして中国』（岩波書店）の中には、現代中国革命の指導者たちに河上肇が与えた影響を分析、紹介されている。ここに加えられるものとして、昨年京大池上惇教授より頂いた安藤実氏の「許濂新——人および社会主義経済論」という論文を紹介しておこう。安藤氏の労作は静岡大学人文学部の『法経研究』（第31巻3・4号、八三年三月刊）という専門雑誌に掲載され、本会会員の多くの方の目にふれないものである。

「中国革命がつくり出した研究者像の一つの典型」とともに「日本の河上肇の影響の大きさ」に安藤氏が思い至って訳出された「許濂新自伝」が本論文の前半を構成している（ここではこの自伝、それも河上にふれた箇所のみを紹介にとどめる）。

許濂新氏は中国科学院経済研究所の所長で、現代中国の代表的経済学者の一人である。一九八〇年刊行の『許濂新経済文選』の「あとがき」に自から半世紀に至る学習、研究活動の経歴が述べられている、安藤氏はこれを訳出された。

「自伝」は、「五十余年まえ、わたしが中学で勉強していたころ政治経済学を学ぼうなどとは夢にも思わなかった」ではじまり、一九二六夏の末に広州の中山大学に入学、西洋文学を勉強した。翌二七年四月、蔣

介石の白色テロの恐怖下にあった大学を逃れ、故郷に帰り、文芸批評を勉強するうち、その武器として唯物史観を学ぶようになり、そこで社会の経済的基礎に対する興味が引き出された。一九二八年「静かな岬にある厦門大学の政治経済系に入った」が、経済原理の教授はマーシャルを尊敬しているイギリス人とシュンペーターを崇拝しているドイツ人であった。この大学で数カ月を過ごし、一九二九年初めに上海へ行き、国立労働大学に入った。経済系の主任は、自由主義者で、限界効用説の信奉者である孫寒泳であった。煩悶の時期であった。悩みながらいろいろな経済思想をさまよい歩いた。そして「マルクスの大著『資本論』を理解するために、わたしはその準備を始めた。一連の経済思想史を読むほか、わたしは熱心に河上肇の『新経済学大綱』を学習した。これは陳豹隱が翻訳したものである。河上肇のこの書物を読了したあと、わたしはムアとエイヴリングの共同訳になり、エンゲルスが監修している英訳の『資本論』を読むことにした。一九三一年から進歩団体の出版物に文章を発表しはじめ、三三・三五年初めには『東方雜誌』、『新中華』の二雑誌にいつも投稿し、経済論文などを発表した。と同時に「中国社会科学家聯盟」に参加し、共産党と共産主義青年団のしごとをした。この聯盟の指導に当たっていた杜国庠同志に今日でも学習の援助や、文章の批評、そして激励をうけている。杜氏は「清末に富貴で日本に留学した。かれは京都大学で河上肇が主任をしていた政治経済学系の第一クラスの学生であった」と。(昭和三年一月現在の京大経済学会の名簿の「ト」欄に杜国庠、大正八年卒、学科は「英、経」とあるが職業、住所欄は空白である)

一九三五年二月上海で逮捕され、徒刑判決を受け、蘇州盤門外の軍人監獄で服役した。散歩もダメ、話もダメというつらくきびしい生活であった。(この獄中での出来事を少し長い引用して、許氏自伝の紹介を

止めよう)

「しかし世の中のこととは、人の予想をこえるものがある。こういう窮状にあったとき、前途に曙光がさしこんだ。ある日、ほとんど失明にちかい外まわりの人(獄舎にいる囚徒で、獄側によって犯人のかわりに水を運んだり便器をかつぐために使われている人)が、水を運んできたとき、わたしに話しかけた。『どうも様子からみると、あなたは知識人のようだが、どうだね。わたしは答えた、「その通りです。わたしは大学卒です。』あなたは河上肇の『経済学大綱』を読みたいかね。これは思わぬ吉報と、わたしは、「読みたい、読みたい。それはたいへん良い本です。』かれは言った。『それは日本の改造社の日本語本だけど、あなたは日本語は読めるのかね。』このことは、わたしに冷水をあびせた。しかしかれは続けて、「心配いらんよ。わたしは日本語読本をもっているから、あなたはまず日本語をならって、それからそれを読めばよい。』

かれはまたわたしに、監獄内では、むかしは禁書はそれほど厳格ではなかったこと、一九三三年から、日常的に獄房の検査が始まり進歩的書籍を探し当てると、ただちに没収されるようになったこと、この河上肇の本は、かれが心愛する読物であることなどを語った。敵の捜査から免がれるために、かれはこの本を便器の下におき、夜中に起き出して穴を掘りこの本をボロ布で包んで深く地下に埋めた。続けてかれはいった。『もう二年以上も埋まっている。便器の下だから臭いかも知れぬ。もし臭いのがイヤなら、やめるよ。』わたしの答は大変ハッキリしたものであった。『こういう良書は、臭くたってかまいません。』二日後に、看守の油断に乗じ、かれはこのボロに包まれた本をわたしにもってきてくれた。

.....

ぐあいのよいことに東京に留学したことのある獄友が、わたしと同じ房に入れられていたので、わたしは片カナから教えてもらい、毎日読ん

で、三カ月後には、予想よりはやく、『日本語読本』を読み終え、思いがけず、河上博士の『新経済学大綱』を一句一句読んで理解できるようになった。一九三六年冬、わたしはほとんどこの本を読了した。これはわたしが河上博士のこの著作を読んだ第二回目であった。わたしは寝食を忘れてこの本を読み、日本語の意味を理解するほか、くり返し経済理論と弁証法の関係を考えなければならなかったし、また同囚の何人かの獄友に講義したりしなければならなかったので、印象は深いものとなった。

河上肇のこの本はカウツキーやローゼンベルクと比べてみて、たいへんすぐれている。カウツキーとローゼンベルクの二人は、『資本論』の生き生きとした豊富な内容を、ただ形式的かつ文章的に圧縮してしまい、少しも生氣のない、少しも唯物弁証法の意気のない要約にしてしまっている。河上肇は『資本論』の全体に流れている唯物弁証法と唯物史観をつかみ出している。わたしはこの本から、はじめて商品にふくまれる使用価値と価値の対立と統一、商品が貨幣に転化する必然性、また貨幣が資本に転化する歴史条件を理解することができた。監獄はまことに読書に好適であり、わたしは蘇州軍人監獄で政治経済学と哲学が密接に結びついていることを学んだのである。『軽妙な筆さばきで書かれた許氏明解な日本語を提供された安藤氏の意図を十分に伝えられなかったことをおわびいたします』

図書紹介

河上肇全集 岩波書店（刊行順 前号つづき）

第二一巻 解題 杉原四郎・一海知義

一九八四年二月

詩歌集・詩話集・獄中の手記ほか

全集月報 24

戦後世代から見た河上肇（沖浦和光）、河上肇音読会のこと（塩田庄兵衛）、前号高島さんの書簡に答える（松尾尊兌）、松尾尊兌様（高島喜久男）

第二五巻 解題 杉原四郎・一海知義

三月

書簡二 大正一四年より昭和一一年まで

全集月報 25

岩波文庫版『資本論』出版のころ（宮川実）、『河上日記』を読んで――終りよければすべてよし（今村太平）、饅頭を恋うる歌など――河上肇の短歌について（久保田淳）

第二六巻 解題 杉原四郎・一海知義

五月

書簡三 昭和一二年より昭和一五年まで

全集月報 26

河上経済原論聴講記（宮崎市定）、回想の河上肇先生（風早八十）、河上肇の生れた岩国（桂芳樹）、△資料紹介▽河上肇野球観戦の資料二点



会 員 通 信

一、ご逝去をいたします

お知らせの方、追悼文をお寄せください。

○永々お世話になりましたが、本年三月一〇日死去いたしましたので、お知らせ致します。京大経済、昭和三年卒、増田義雄（千葉県市川市増田順子）

○横正博 京都府宇治市広野町尖山二の九六

○矢野恒範 京都市右京区西京極東側町二五

（以上、児玉誠氏よりのご連絡）

二

○安藤重次著「光は東方より」、大変感銘を受けました。総会で宇都宮徳馬先生の講話を聞けなかったのは残念ですが、杉原先生全集編集についての講話を興味深く拝聴し得、前年度の脇村義太郎先生、一海知義先生の講話ともども、先生方のお人柄、うんちくがにじみ出て、日頃、業務に追われ晴耕雨読の境地にほど遠い愚生には殊に感銘を受けております。当日のスナップ同封します。しかるべき方々にご転送賜われば幸甚です。数年前、一海知義先生の「河上肇詩話」を拝読、河上先生が陸游の詩を愛読され、自ら漢詩を作られた動機を知りましたが、旧制の中学、高校で漢文、漢詩はずいぶん読まれたものゝ、漢詩の作法については全く学ぶ機会がなく、一昨年の総会の席で一海先生に適当な入門書の紹介を乞いましたところ、入谷仙介先生の「漢詩入門」をすすめられ、早速愛読、ようやく面白味も湧いてまいり、古本屋にて「詩韻含英」、「詩語集成」を求め、ここ一年ほどはも

っぱら作詩の勉強をしております。これも貴会に入会した縁であると感謝しております。（大阪市西区 佐田季男）

○老父へのお見舞ありがとうございます。今年の嚴寒を予想以上に頑張って、一回も寝込むことなく、今日まで過しております。いよいよ来る三月二三日に満九〇才となりますので、心中それを目指しております。三度の食事は家族と共に食堂でとり、日中は椅子に坐って軽い読書、テレビの毎日ではほとんど横にならないようです。たまに来客があれば一時間前後、お相手しているようです。また、昨年河上肇記念会の総会の時のスナップありがとうございます。清らかなつどの想い出がよみがえります。（下略）（大阪府堺市 藤田整）

（註）文中、老父は藤田敬三先生のこと。

○会費送らせていただきます。異常気象で梅の開花が遅れ、結実も少いようです。法然院の梅はどうでしょうか。（滋賀県野州町 吉田忠）

○いつも欠席で申し訳なく存じます。二人分（正喜、雪子）の会費お送りします。（いつまで入っているのか迂滑なことながらよくわかりませんので）とにかく、表記通りにさせていただきます。（京都市右京区 建林正喜）

○先生の墓守だった法然院第三十世貫主橋本峰雄氏、本年三月七日入寂五九才だった。同郷の鳴門市のご出身。老生には感慨無量なるものがあった。（徳島市 三村文一）

○早朝散歩で時々法然院にまいります。ご任職も故人となられ、砂絵を見てなつかしくおもい出します。ご自愛下さい。（京都市中京区 児玉誠）

○会費などとはおこがましく、供華料としてもわずかでお恥しい。紙一枚分ぐらいいい。丁雲の方は六年前に亡失しております。橋本先生には一度お話をさせていただいたことがあり、よい方を失った思い

がしております。先日も京都へ行ったので法然院にゆき散策させて貰い、よそながらお詣りいたしました。ご発展を祈ります。(神戸市垂水区 曾我まり)

○大門さん、本会のお世話ありがとうございます。会報、さっさいお願いします。

(大阪府豊中市 八五翁 井関安治)

○五九年会費送ります。小生、戦後の卒業とて、河上祭によった一人として偉大な先人の業績を精神で偲ぶ総会、欠席会員で申し訳ございません。一回出席致したいと思いつつ、実現出来ませず懇しからずお許し下さい。(奈良県橿原市 島田幸男)

○会報16号受取りました。去年も今年も「滝川事件を偲ぶ会」の火つけ役を演じましたが、具体的な仕事は何もありませんでした。今度の会報を見て、一度、鈴木重才のことを書いておいた方が良くないかと考えました。西口さんの「小説蠅川虎三」にあまりミスがないのにおどろきました。書く前に我々数名と会って、話し合うことぐらい出来なかったろうか、と残念に思いました。重才のところも、たしか、間違っていました。小説ではなくて蠅川伝をつくらなければいけないと、蠅川ゼミ仲間で話し合っております。(東京都豊島区 内海庫一郎)

○今年度年次会費をお送りします。名物男の稲田大人も亡くなられ寂しくなった。子息、素臣君はよくと静岡高(旧制)の同窓です。今秋の法然院会にはなんとか出席したいと思っております。期日前迄にお知らせ下さい。(横浜市戸塚区 田中文蔵)

○京都に行く機会には安井功さんにいろいろお世話になっていきます。

(東京都目黒区 松俊夫)

○八年前の脳血栓は幸い痕跡のみで、今春順天堂病院CT検査の結果(原稿書きで二日徹夜)幻覚症状を起し、家族の心配で入院検査。血圧も正常保持。ところが昨年、軽い心筋梗塞(若い頃スポーツ心臓の

肥大との診断を意に介さなかったせい)で入院。七三才。無理禁物と毎日マイペース(二ノ三キロ散歩と食餌療法で町の世話役程度がやっとの昨今で、先生の遺徳をたつて後継の蠅川先生に学びまだまだ不勉強と考え、自身の宇宙を少しでも長くと自重。(千葉県船橋市 田中薫)

○会報をお送り下さいましてありがとうございます。河上先生が生前、法然院を愛されたのは、単にお寺の風景を愛されただけでなく、もっと心奥において「科学的真理」と「宗教的真理」の統一的理解を仏教に求めていたのではないかと、最早、尋ねるすべもないが、推量せざるを得ません。(東京都国分寺市 佐藤克己)

三

○会報ご送付いただきありがとうございました。会費を送金しなければなりません、何分、老令年金生活では、やりくりもつきかねます。申しわけありませんが、退会させていただきます。(大阪府八尾市 丹羽善次)

(事務局より)

今年の総会に会費免除の老令会員の制度を提案しますので、お申し込み願います。いただいた今年度会費はお返しできませんが来年度からは会費のご心配はいらなくなると存じます。それよりも、あなたの過ぎ来し方を語っていただきたく、お願い申し上げます。

○払込通知票など送金用紙を受領しましたが、送金金額が判りません。金額をお知らせ下さい。(京都市左京区 天野敬太郎)

(事務局より)

同じようなお問合わせを、ときどき、いただきます。会報の最終ページに、河上肇記念会会則がのせてあります。その第六条に「この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。会費は年額三〇〇〇

円とする」とあります。つまり、会費は年額三〇〇〇円でありまして、今年で満一二年になりますが、その間会費の変更はしていないようです。

○墓前の先生の句碑、採拓させていただきたい念願で燃えています。なかなか許しは出ないでしょうが、もしご無理が叶えていただけるならどこにお願いすればいいでしょうか。貴会で取扱っていただけることは知っていますが、やはり自分の手で採掘出来ればと思うのです。(岐阜市 松崎義夫)

(事務局より)

墓地の管理者である法然院貫主と遺族の方(会員の羽村夫妻)の許可はぜひ必要でしょう。その他歌碑建立の中心的人物であったと伺っている石川興二先生は故人となられていますから、大門英太郎氏(会員で事務局長?)この三者の諒解をとられるのが世間常識にかなうかと存じます。法然院さんには、採拓の当日もその前後にご挨拶なさるのが礼儀ではないでしょうか。なお、句碑ではなく歌碑です。念のため。

○記念会会報16号、確かに受け取りました。59年度会費送ります。なお、会報No1~No8残部ありましたら、お送りいただきたく、そのお代おしらせいただければお送りします。(東京都杉並区 渡辺真澄)

○記念会会報第11号が欠番になっているので、同号の残部があればご送付下さい。一〇〇〇円はその費用に、残金はカンパの一部に。(大阪府河内長野市 藤本福太郎)

(事務局より)

わたくしの手許には古い号はありません。大門さんの所に多少残っているように伺っておりますので、依頼しておきました。残部のないものはコピーになるかと存じます。

四 退会 ながいあいだ、ありがとうございました……

○小生老令のため、河上肇先生記念会を退会します。右お届けする。六月七日。(神奈川県鎌倉市 別府芳雄)

○都合により本年度で退会します。記念会のご発展を祈ります。(京都府八幡市 細野誠之)

五 入会と転居

○初夏、風薫る候、ご清栄のこととおよろこび申し上げます。会報をご送付いただき、拝受いたしました。先般、白川会の節は失礼いたしました。約四十数年振りの再会ではありましたが、京都学生運動のヒューマンな精神が脈々と続いているこの会の雰囲気、意義捨て難いものがあります。さて、「河上肇記念会」には入会させていただくことにし別便で会費を振込みます。河上先生の郷里、山口県に一九四五年以来住んで、若い先生の郷土の新聞への寄稿や、山口高等学校、学生簿の発掘など、ポツポツしてまいり、東京河上会誌上に発表してきました。いずれ近いうちに、京都へ住むつもりでありますので、何卒、よろしくお願いいたします。(徳山市 脇英夫)

○ご無沙汰致しております。会報で会の活動も発展しておりますこと喜んでいきます。小生も、実践活動のひまを見ては、再版全集をはじめから読み直して勉強しています。年会費に若干ですが会運営費を贈りますので、ご笑納下さい。(横浜市中区 佐藤敬治)

○いつも会報をお送りいただき、ありがとうございます。今回より入会させて頂き度く、会費をお送り致します。なお住所は住居表示施行により表記のごとくなっていますので、よろしく。(東京都練馬区東大泉町五の三九の一三 藤塚知義)

○前略 このたび(五九・五・一一)下記に移転いたしました。三五年間暮した京都を去るのは、淋しい思いました。しかし京都へは三〇四〇分の近距離なので、胸をさすっています。草津は田園都市で高層ビ

ルなどではなく、田畑や森がたくさん残されています。久しぶりにコンクリート・アイランドでない自然の風光を味わっています。(滋賀県草津市野路町一九〇三の九四 田中米一)

○左記に転居しました。新住所▽二三横浜市港北区高田町二六五三の一五 金子文夫)

墓 参 記

○左の方々、墓参のため来京され、清掃と献花をして下さいました。

東京都立川市 上野トク子、東京都千代田区 中西富喜子、川崎市川

崎区 三田美津江、神奈川横須賀市 樽見せい

案内は清風タクシー安井功氏の由。

○若き学究、阪部有伸氏、上海社会科学院、歴史研究所研究員、副所長湯志 先生もはるばる参られております。

○京都大学名誉教授、高知大学名誉教授、同大学元学長の山岡亮一氏、この方にはしばしば参りいただいているように記憶します。

○河上先生、本日は先生のお墓参りと法然院伽藍の特別公開に参りました。岩波書店発行の先生の全集、楽しく読ませていただいております。

(大阪府堺市 小田正夫)

○河上先生、法然院の椿を観に来ました。(大阪府堺市 小田正夫)

○その他会員で日ノ協会全国理事 神辺英一氏、吉見の里書房 原伊太郎氏、歯科医師 小川昭治氏、栗田芳子、鈴木恭子、鈴木愛子、佐藤

達朗、岡ゆかり、八東裕などの名刺が見えます。

当 番 雑 言

○若い人達に人気ありと聞く浅田彰氏の『構造と力』を野次馬の当番生も読む。この二、三〇年の間に注目され、ひとといった書物の著者達の名が次々と現れ、初見の一、二の名が見える。それら思想家達への批判の形をとっている部分が多い。要約と批評はその対象となる人達への認識が前提となる。古い野次馬にはさほどではないが、若い読者にとっては、読書蓄積の面で不利に働き、読みづらい書物のはずである。若いあせりと、若者らしいカンがこの書物を選ばせるのであろうか？わからないではない。当番生も身に覚えがある。苦笑すればよい。それらはどうでもよい。この書物では、現体制の把握、つまり資本主義体制の把握という面で、マルクスがいくども援用され、「資本主義の予定調和性」は否定される。だが、マルクスの「資本主義が終るのは必然的であり、また終らせることが、人間への愛である」という面は最終ページに至る迄現れない。まして、「資本主義の終り方」のことなんぞは……。そして資本主義の終らない範囲での、他人のことまでかまっちゃられない、力の発揮の仕方が賞揚される構造になっている。著者の好みらしい、幾何的表現で言えば、減衰振動の収束部分を踊る小人のイメージです。このメルヒェンはとても立体的な場にあるとは申し兼ねる。カッコよさを気取る、チマチマしたカッコワリイ青年像が浮ぶ。ワイ小にして陰惨な風景——未来の縮図なるか？

○三月一〇日、会がお世話になった橋本師の葬儀が行われ、杉原世話人代表に代り、会を代表して大門さんが参列された由。

○その明くる日、故大橋隆憲先生を偲ぶ会が催された。京へのぼる余裕はおろか、都島にこと問うことすら出来ずに終った。資本主義の世の

中に辛いのは下層労働者ばかりではないようで、かねに恨みはかず、零細企業のお金繰りに追われる身の嘆き。晩年、ことに宗教に興味を持たれていたように感じた。河上の科学的真理と宗教的真理。クリチャンには自分も同じ障害者になってほしい、という人がいる。そういう心が福祉には必要でないかと話された。福祉に対する仏教教団の不熱心を批判して物議をかもしもったこともあった。学友に先生に身を以って守っていただいたという者がいる。偲ぶ会に出席の模様は未だ訊いていない。

○当番生に送られて来た、名刺やメモのあるものは濡れにじんで、読めないものが交っていた。河上肇、秀墓前の名刺受けが壊れ、事務局の岡村氏が修理することになった由。この名刺受けは記念会の扉の一つとなっている。そういえば、傍の墓碑も変体仮名が多くて、いまの若い人達には読めないで、解説の立札が必要なのかも知れない。こういうことはいずれも私は好まないのだが、会としては大切にしたい。

○三月二三日東京河上会の代表幹事を長くしておられた白石凡氏葬儀。当会代表世話人の杉原先生が弔詞を捧げられた。東京河上会では事務局の藤原良雄氏が怪我をおして、受付に当っておられ、脇村義太郎先生はじめ、野口務氏、生沼曹喜氏の姿も見られた。当番生はあまり、人の顔も知らず、ひと見知りする方でもあり、他社への訪問の約もあったので、出棺見送り後、早々に会場を辞して走った。この日、暖かなれど、江戸城堀端の桜花、蕾堅し。

○五月一八日東京代表幹事代行の大島清氏の葬儀、武蔵野市で無宗教で営まれる。さながら法政大学葬にて、中に農民運動史研究家の一柳茂次氏の弔詞、烈々。ケヤキとずえを吹く風露をふんで寒速く、急逝を痛む。風邪をおして参列し、こじらせて臥床幾日。

○六月一五日、東京河上会主催、白石、大島両先生をしのぶ会と総会。

新しい代表幹事には河上の棺をになった住谷一彦氏が就任された。父子二代、東、西の会をお世話いただくこととなる。白石、大島両氏のご遺族も出席され盛会。交々語る故人をしのぶ話のつきぬ間に、学士会館の扉、鎖されるに到り全員退出す。外は風、詳報は東京河上会会報に俟つ。

○七月二日、帰宅するや「はた・やわらさん、当選しましたよ」と妻が告げる。憲法をくらしに生かそうという知事、四選目はご苦労様と思いつつ、ひそかに喜ぶ。畑和さんは記念会の会員でもある。

編集後記

○「編集者は頭をまるめて坊主になれ」「編集のシロウトの暴挙」以前、編集にタッチし、わたしがやった部分への評価であった。そんなわたしが、ほろび去った武蔵野のへんで妻と二人、拙速の編集することとなった。会員の中、会員のまわりによい編集者がいると、おりにふれ耳にするのだが、なかなか姿を現わしては下さらない。このつたない編集が引金となって、記念会会報が刷新されることを祈るばかりである。

○次号は八四年総会の案内号となります。編集はセンター子の細川さんになる予定です。ご期待下さい。(O)



河上肇記念会

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は、事務局へご一報下さい。
〒五四二 大阪市南区島之内二〇一九(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内 河上肇記念会



貧乏物語 初版

河上肇記念会 会則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。
 - 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
 - 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
 - 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
 - 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選出、総会において承認をえる。
- 世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもつてあてる。会費は年額三〇〇〇円とする。
 - 七、この会則の改廃は総会の議決による。

京都（きょう）に“煙”あり

1965年 創刊 只今 47号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番
振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(70~80才)が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを“声”欄に収めているのも特色

A 5判 120頁 頒価 500円 冊 200円